九州における吹奏楽連盟が果たす役割についての一考察

A Study on the roles of the Wind Instrument Music Association in kyushu

柴田　裕二※　　坂元　洋一郎※※
Yuji　Shibata※　　Yoichiro Sakamoto※※

要旨：新型コロナウィルスの感染拡大により、学校教育現場は一時休校になり、様々な学校行事は中止もしくは延期になった。また部活動においては、それぞれの競技団体が大会開催の是非をめぐり議論になった。その中で吹奏楽や合唱では、当初楽器の演奏や歌うことによる飛沫の危険性を問われ、十分な練習環境が保持できなくなった。しかし、多くの音楽関係者や医療従事者、研究者らが飛沫の検証実験を行うことで、吹奏楽連盟からもガイドラインが発表され、練習や本番での活動ができるきっかけを作り出した。そこで、我々はこの連盟の存在意義について改めて歴史を振り返り、この組織が地域社会に対しどのような貢献をし、地域経済にどのように影響を及ぼしているのかを研究することとした。
キーワード：吹奏楽、吹奏楽連盟、コンクール 、アンサンブル

１．はじめに
２．歴史と目的
３．課題
４．波及効果
５．まとめ

１．はじめに

今日吹奏楽がこのように発展した理由は二つ考えられる。一つは吹奏楽連盟が主催する年間行事である吹奏楽コンクールやアンサンブルコンテストの普及、もう一つはメディアによる吹奏楽ブームであろう。近年の吹奏楽コンクールは年々技術も向上し、選曲のレパートリーの難易度も高くなっている。そのコンクールで高い賞を取り、全国大会を目指す学校が増えてきた。その一方、近年少子化で部員数も減少し、コンクールに出場できない学校もあるため、連盟はアンサンブルコンテストやソロコンテストといった少人数で演奏する形態にも力を入れている。それは、一人ひとりの個を高めることを目的とした大会を催すことで、吹奏楽の普及につながっている。また、メディアで吹奏楽を取り上げた番組が人気を博し、中学生や高校生の吹奏楽人口が増えたことは確かである。テレビ番組で吹奏楽部の練習風景やコンサート風景などが放映されたことや吹奏楽をテーマにした映画などが作られ、吹奏楽にあこがれを持つ子供達が増えたことが考えられる。しかしながら、吹奏楽を経験した者の中からプロになれるのはごく一部の優秀なプレーヤーしかいない。それ以外のほとんどの人が、社会人の一般バンド（コミュニティーバンド）で趣味として音楽に触れる機会を持つ人が多いようだ。現在

※日本経済大学経営学部芸創プロデュース学科　　※※長崎県立大学地域創造学部実践経済学科

の吹奏楽人口は500万人とまでいわれているが、その要因として以下のことが考えられる。

・学校現場での課外活動（部活動）としての確立

・社会人となった卒業生たちが集まるコミュニテイーバンドの普及

・企業が持つ社会人バンド

・プロの吹奏楽団

主に部活動が人口を増やしていった要因ではないかと考えられるが、その後社会人となっても吹奏楽を続ける人たちが増えている傾向にあると思われる。その中で、九州・福岡の吹奏楽の活動は盛んで、現在の加盟数は1599団体、福岡支部だけでも282団体が加盟している[1)]。

吹奏楽連盟が発足して60年を超える今、吹奏楽の発展と吹奏楽に携わる人口は急速に伸びてきている。それは、戦後の教育界において吹奏楽の普及が行われ、音楽教育の中で重要な位置を占めることになったことだ。このように吹奏楽人口が増え、音楽に携わる者が増えてきたこの日本社会において、吹奏楽連盟という組織がどのように生まれ、社会に貢献してきたのかを調べることにする。諸先輩方の様々な知恵と力が発揮され今日に至ることを理解し、今後さらに発展するにあたり課題を見つけることも目的とする。

２．歴史と目的

2-1．九州の吹奏楽の歴史

九州、福岡の吹奏楽連盟は、20周年を機に記念誌を発行し、その後５年ごとに記念誌を発行している。これまでの吹奏楽連盟が果してきた役割について、その資料に基づいて行事の歴史を追ってみた。過去の記念誌をもとに歴史を振り返り、現在においてどのような影響をおよぼしているのかを考察する。また、その中で現在に至る吹奏楽の発展がどのように推移し、またそれらによる地域社会がどのように影響されているのかを考察する。

明治維新の際、薩摩藩の青年らがジョン・ウィリアム・フェントン（第10連隊第１大隊軍が学長）の指導を受けたとされるのが、日本の吹奏楽の誕生と言われる。近代日本の夜明けと言われる幕府と各藩のせめぎ合い、そして鎖国か倒幕かの狭間で、有名な生麦事件から発した薩英戦争で、イギリス軍を撃退した。その時イギリス海軍の軍楽隊（ブラスバンド）が、兵士の戦没者慰霊のための水葬の礼に付する儀礼式の音楽を演奏した。軍楽隊が演奏する儀礼式は鹿児島湾内そして城下まで響いた。それを聞いた側近がいたく感激して、藩主島津久光公に、薩摩藩でも洋式軍楽隊を創設すべきことを国許に進言し、これにより薩摩藩軍楽伝習隊が編成され約30名の薩摩藩士がフェントンの指導を受けるため横浜に派遣された。それが「サツマバンド」の誕生である。「薩摩藩洋楽伝習生」が寄宿舎として過ごし吹奏楽の練習に励んだのが、横浜にある當山本牧山妙香寺で、「日本吹奏楽発祥の地」として呼ばれる。ただ、薩摩藩主島津久光公の英断から始まったものであり、九州が吹奏楽の由緒ある地であることには変わりない[2)]。また、福岡県の筑豊地区では、明治の二つのバンドの写真が見つかっている。一枚は明治33年11月３日に撮影された「天道音楽隊」、もう一枚は明治36年撮影、「有安音楽隊」である。「天道音楽隊」は海軍、「有安音楽隊」は陸軍の軍楽隊に教えてもらっていた[3)]。このように、九州は吹奏楽との縁が深く、今もなお吹奏楽が盛んに行われている所以なのかもしれない。

2-2. 吹奏楽連盟設立の目的

昭和14年11月に大日本吹奏楽連盟が結成され、その翌年昭和15年に全九州吹奏楽連盟が成立している。その後、戦争により活動停止となるが、戦後吹奏楽連盟再建の声が上がり、昭和30年３月、名古屋における第一回の全国理事会が開かれ、全日本吹奏楽連盟という新たな名称で復活し、昭和31年２月、西部吹奏楽連盟が成立される。当時、戦後吹奏楽連盟復活にあたり、次のような議題が挙げられている[4)]。

１．吹連今後の活動に関する件

２．連盟機構改革、役員改選に関する件

３．楽譜、楽器の入手に関する件

再構築に向けて当時の関係者の強い意志と信念がうかがえる。その中で、初代理事長になられた堀内敬三氏は「吹奏楽の再建と革新」として次のように述べられている。（昭和21年１月号、音楽之友社より）

「……戦前は吹奏楽を軍国色一本に改めようとした為に吹奏楽は行き詰った。これまでのものは面白くも何ともない音楽、ただ「鳴っている」と云うだけの、何の取り柄もない音楽を吹かされすぎた。これからの吹奏楽は、誰でも聞いて楽しめる音楽を奏したいものである。（中略）吹奏楽の指導者は是までの状態から脱却し、新しい立派な音楽を創る責任がある。平和の利器としての吹奏楽の使命は大きい……」[5)]。

このような当時の関係者の熱意が、軍楽隊から新しい吹奏楽への転換期にもなり、学校教育における指導要領の改訂などで、スクールバンドの普及が高まったと言える。

吹奏楽連盟の目的は、「吹奏楽及び管・打楽器による音楽の普及・向上を図り、もってわが国の芸術文化の発展に 寄与することを目的とする」[6)] とされているように、音楽教育の中で特に管・打楽器を用いて音楽の普及・発展を望んでいる。福岡吹奏楽連盟においては、「吹奏楽を通して青少年の健全育成を図る」[7)] という創立当初からの理念に基づき運営されている。

2-3　吹奏楽連盟の沿革史（抜粋）

吹奏楽連盟の沿革史をもとに行事の始まりを時系列で並べてみた。ここでは、新規事業の始まりと加盟数や加盟団体数の推移をみることで、吹奏楽の発展を見ることができる。それぞれの行事を始めるには、音楽の普及に強く志を持った諸先輩方の努力がうかがえる。

2-3-1　九州吹奏楽連盟の沿革史（抜粋）

昭和31年（1956）	２月26日	西部吹奏楽連盟　結成
昭和31年	11月11日	第１回西部吹奏楽コンクールを九州大学医学部講堂で開催
昭和34年（1959）	11月15日	第７回全日本吹奏楽コンクールを北九州市で開催（主管）
昭和38年（1963）		吹奏楽コンクール九州大会を２日間で実施
昭和48年（1973）	５月19日	全日本吹奏楽連盟の法人化に伴い、社団法人全日本吹奏楽連盟西部支部となる

昭和51年（1976）１月６日　第１回全九州吹奏楽ソロコンテストの開催（昭和55年度まで）
昭和53年（1978）１月６日　第１回全九州アンサンブルコンテストの開催
昭和57年（1982）４月29日　西部吹奏楽連盟より九州吹奏楽連盟と改称
昭和58年（1983）８月　第１回九州大学吹奏楽連盟合同演奏会の開催
11月23日　第１回九州マーチングコンクールの開催
平成６年（1994）２月　九州アンサンブルコンテストを２日間で開催
平成16年（2004）２月　九州アンサンブルコンテストを３日間で開催[8)]

（出典：九州吹奏楽連盟創立50周年記念誌より）

2-3-2. 福岡吹奏楽連盟の沿革史（抜粋）

昭和31年　西部吹奏楽連盟と同時に、福岡吹奏楽連盟（西部吹奏楽連盟福岡支部）が発足
昭和36年　吹奏楽祭と兼ねて、第１回西部吹奏楽コンクール福岡支部予選を開催
昭和38年　吹奏楽祭とコンクールを分離して開催
昭和42年　第１回ブラスフェスティバル・Xmasチャリティーコンサートを開催
昭和46年　第１回アンサンブル・ソロコンテストを開催
昭和52年　第７回アンサンブルコンテストを開催（ソロコンテストを廃止）
昭和54年　コンクールを２日間で実施
昭和57年　コンクールを３日間で実施
Xmasチャリティーコンサートを２日間で実施
昭和60年　コンクールを４日間で実施
（コンクール九州大会への推薦が支部から県単位に変更のため、中学校・高校の部の県大会を開催）
昭和61年　コンクールＢパートの部を支部予選で開催
（コンクールの小学校、大学、職場・一般の部を県大会で開催）
平成６年　コンクールを６日間で開催
平成12年　コンクールを７日間で開催（中学校５日、高校２日）
平成14年　第１回地区中学校吹奏楽コンクールを開催
第１回リーダー講習会を実施[9)]

（出典：福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌より）

このように昭和51年度より全九州吹奏楽ソロコンテストが開催されていることから、吹奏楽連盟が発足して20年の間に吹奏楽人口も増え、さらに個々のレベルをアップして吹奏楽の向上に尽力された形が見える。また、昭和57年に西部吹奏楽連盟から九州吹奏楽連盟へ改称され現在に至っている。

平成６年には九州アンサンブルコンテストが２日間開催となり、参加団体の増加により日程を複数日必要になったことがうかがえる。昭和31年に吹奏楽コンクールが始まって以来、60年余りの時を経ていまだに人々に親しまれていることは素晴らしいことである。今では親世代が活動していた時代を

我が子に向け、親子で吹奏楽に触れる家庭も多いようだ。それは、吹奏楽連盟が築き上げた歴史の賜物であると言えよう。生涯音楽と関わりを持つことができる手段であり、それは演奏することだけでなく、他の演奏を聞くことによっても吹奏楽を親しむことができるからである。

2-4. 現在の活動状況

現在連盟が主催する主な事業は以下の項目がある。

A．吹奏楽コンクール
B．吹奏楽祭
C．アンサンブルコンテスト
D．ブラスフェスティバル
E．マーチングコンテスト
F．　その他

ここでは、九州吹奏楽連盟及び福岡吹奏楽連盟の歴史を見ながら、現在の活動状況を見ることにする。

A．吹奏楽コンクール

a）九州吹奏楽連盟

昭和31年　第１回西部吹奏楽コンクールが九州大学医学部講堂で行われる。

その後、毎年コンクールが行われている。今年は第66回のコンクールが行われた。

昭和48年第１回全九州吹奏楽指導者ゼミナーを開催。

昭和51年第１回全九州吹奏楽ソロ・コンテストを開催[10)]。

九州各県でコンクールの予選が行われており、ここでは福岡支部の活動状況を見てみることにした。今日では当たり前となっている各行事が、どういう意味をもって始まったのかを見ていく。

b）福岡吹奏楽連盟

昭和36年第１回吹奏楽祭（コンクール支部予選を兼ねる）。

昭和39年コンクール支部予選と吹奏楽祭（第３回）が分離されて開催。

B．吹奏楽祭（以下、福岡吹奏楽連盟より）

吹奏楽祭は、いろいろな事情でコンクールに出場できない団体にも、発表の場を設けようということで始められた。当初はコンクールと兼ねておこなわれた。現在では、出演団体も増加し２日制になるなど、活気に満ちた吹奏楽祭となっている[11)]。

C．アンサンブルコンテスト

音楽を愛し、演奏する喜びを体感すると共に、合奏技術の向上を目的として昭和47年度「アンサンブル・ソロコンテスト」としてスタートした。その後ソロコンテストを廃止、アンサンブルのみとして開催している[12)]。

D．ブラスフェスティバル

昭和42年の春、朝日新聞社企画部で福岡吹連の年間行事についての話題、当時は６月の吹奏楽祭と９月初めのコンクール予選が終われば、次の年の吹奏楽祭までの９か月間は何も行事を行っ

ていなかった。このことは吹奏楽活動の発展向上につながらないのではないかということになり、「歳末チャリティーコンサート」としてクリスマス・ブラスフェスティバルを企画・実施することになった。ついては動員力の心配もあり、「福岡音楽文化協会」と共催し、福岡の財界企業の協力を得て（入場券10万円分を分担していただき）、第１回のコンサートを開くことができた。以降福岡吹奏楽連盟単独で開催している。参加団体の増加、会場確保等から１日を新年に実施することにして、名称も「ブラスフェスティバル」を改め、年末の開催を「オン･クリスマス」、新年開催を「イン・ニューイヤー」と名付けることにした。このコンサートは「チャリティーコンサート」を原則として実施、収益の一部を福祉関係に寄付している[13)]。

E．マーチングコンテスト

マーチングコンクールは、福岡吹奏楽連盟の主催事業として始められたが、第３回より、全日本吹奏楽連盟はコカ・コーラ（後に、明治生命にかわり、平成11年に辞退）の協賛を得、全国的な事業として県連への補助金のもとに勧めることになり、福岡県吹奏楽連盟の事業として実施した。その後、マーチングコンテストと名称変更して今日に至っている[14)]。

F．その他

a）アンサンブルフェスティバル・管打楽器ソロコンテスト

アンサンブルの普及を目指し、演奏技術および音楽文化の向上を掲げ始めた。一般団体中心であったアンサンブルフェスティバルも小学校から一般まで参加の幅が広がり平成25年度からは二日間開催となる。高等学校の部のみでスタートしたソロコンテストも平成23年からは中学校の部も設定され、翌24年より二日間開催となった[15)]。

b）キャナルシティ吹奏楽の祭典

この「吹奏楽の祭典」はキャナルシティ劇場の檜舞台で参加者同士が純粋に音楽を楽しみ、他団体との交流を通して刺激を受けることで更なる向上へつながること、また一般にも広く吹奏楽のファンを増やすことを目的として開催している[16)]。

c）ビルの谷間のコンサート

「ビル谷」の愛称で知られるコンサートは、街の皆様に吹奏楽の良さを知ってもらうため、天神にある福岡銀行本店の前庭で野外演奏を行っている。ウィークデーの12時から13時の間で演奏を行い、多くの市民を魅了している[17)]。

d）マーチング講習会

マーチングは単にパレードをしたり、ドリルフォーメーションを展開したりすることだけではなく、一つの規則のもとに自分に与えられたことを確実に果たさなければならない。そのため、誰一人推してギブアップできず、一つの集団としての決まりを守る中で、必然的に責任感が養われることになる。そうした組織や音楽づくりの一環として「演奏しながら歩いてみよう」をコンセプトとし、マーチング活動を取り入れていくことを提言する目的で始めた[18)]。

このように吹奏楽連盟は教育的に配慮のもと、様々な事業を考え実施していることがわかる。

3. 課題

教育現場における課題として次のことが考えられる。

まず、教育課程の改定による弊害や働き方改革（学校業務の過多）についてである。学校現場で部活動を指導する顧問の先生の中には、音楽の専任ではなく、吹奏楽を経験したことのある他の教科を担当されている先生が顧問になるケースがある。また担任業務や進路指導などほかの業務に追われ部活動に専念できる時間が足りないという先生方も少なくない。生徒の練習時間に指導することが本来の活動であるはずが、生徒たちと取り組む時間が限られてしまうことがみられる。特に教育課程の改訂では、部活動の時間制限や働き方改革により今までとは違ったアプローチで部活の指導をしなければならない。平成30年３月に文化庁より発表された「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」によれば、「学期中は、週当たり二日以上の休養日を設ける。」[19] とされている。このことから、指導者は限られた練習の中でより質の高い演奏をつくることを求められている。

演奏が上手になるためには、練習する必要があることは当然である。しかし、限られた時間の中で、個々の能力にあった指導をしなければならない。今までは練習量でカバーされてきた部分を練習の質の向上に切り替えなければ、部活動の大会で高成績を出すことや演奏会でいい音楽を聴かせることは難しくなる。今後、指導者への精神的な負担になりかねない部分である。それを補うために、平成29年４月より部活動指導員という制度が適用された。部活動指導員の概要については、文部科学省が次のように述べている。

学校教育法施行規則の改正の概要

中学校、高等学校等において部活動の指導、大会への引率等を行うことを職務とする部活動指導員について、規定を整備する。

第七十八条の二　部活動指導員は、中学校におけるスポーツ、文化、科学等に関する教育活動（中学校の教育課程として行われるものを除く。）に係る技術的な指導に準ずる。

※義務教育学校の後期課程、高等学校、中等教育学校並びに特別支援学校の中学部及び高等部については本規定を準用[20]。

この制度は、学校の顧問が専門外の場合はとても良い制度であるが、顧問の先生と部活動指導員とのコミュニケーションをしっかりと取ってなければ、生徒達の混乱を招きかねないと思われる。なぜなら、部活動指導員はその技術のみを教えるのが役目であるが、顧問が考える部活動の教育方針に対し部活動指導員が生徒のメンタルケアをすることで生徒が混乱を招き、顧問と外部講師の関係が崩れる可能性も考えられる。そのため、学校の設置者および学校は、部活動指導員に対し事前に研修を行うことになっている。

次に、いじめや体罰についてである。部活動の練習においてよく問題に挙がるのが個人技量の格差についてである。一人ひとりの演奏技量は当然その生徒の資質によって違いが出てくることは当然のことである。合奏をするうえで重要な三要素は、サウンド、音程（イントネーション）、リズムと言われている。サウンドとは音質を意味し、各楽器の本来の持つ美しい音色をいかに出せるかを追求していく。音程（イントネーション）とは、各楽器においても音階や音高のピッチが重要であるが、合

奏では同じ音を同じ周波数に合わせるという作業を行う。この練習は二人以上の奏者が同じ音を鳴らして音程（ピッチ）を合わせることを言うが、初心者レベルでは非常に時間がかかる。上級生と比較するとかなりの時間初心者に手をかけることで、できる子とできない子に差が生まれ、それがお互いのメンタルを追い詰めることになることがある。今では、ハーモニーディレクターと呼ばれるキーボードで音を鳴らし、それに自分の音を重ねあわせてうねりを取る訓練や各自がチューナーという音程を図る機械をもって個別にその測定値を見ながら音程を合わせる訓練ができるので、ほとんどの奏者がそれを使っている。ただ、機械に頼るトレーニングだけではなく、各自の耳のトレーニングをすることの方が重要なのであるが、将来音楽家を目指すか否かでその自己意識は違い、機械に頼る方が時間のロスを防ぐことができるため、多くのスクールバンドはこの方法に頼っているようである。リズムとは、ある一方向に流れるものと言われている。最も身近な周期的なリズムとして考えられるのは時間であり、音楽は時の芸術ともいわれる。そのリズムにおいて、合奏では同時に音を出すことや速度に合わせて音を同時に鳴らさなければならない。ところが、リズム感或いはテンポ感といったセンスに差があるとき、どうしてもそこにずれが生じる。そのため、合奏が思うように進まないということもよくある。そこで、テンポ速度を共有するためにメトロノームという機械をつかい、リズムを合わせることの練習をする。一人ひとりの感覚のずれが合奏の支障となり、人間関係が悪化する原因ともなり得る。このように、一つの演奏をより質の高いものを目指すには、かなりの時間を要することが考えられる。そのため、ほとんどの学校は土日祝日に合奏の時間をあて、長時間の練習を確保する傾向があった。特にコンクールにおいては、近年各学校の競争が激しくなり、どの学校もレベルアップされてきている。

大学の部活動を指導していて強く感じるのが、一部の高校生が大学になって吹奏楽を継続しないということだ。その理由は、高校までの吹奏楽の練習過程において、長時間の練習や技術の格差による反復練習の積み重ねなどが考えられる。また、上位に行くことを目的とした指導が生徒の間で、いじめやメンタル面での負荷となる傾向もみられる。このようことから、高校生までは精一杯部活動に励み、大学へ進学したら他の勉強に取り組むといったことを考える生徒も少なくはない。それゆえに、高校生の時に十分に吹奏楽をやりつくしたという燃え尽き症候群のようなものを感じている生徒もいると思われる。このような問題を解決するには、高いレベルの音楽を追求する姿勢と各自の音楽性が伴わなければならない。

最後に、新型コロナウィルス感染拡大に伴う部活動の有無についてである。昨年から猛威を振るう新型コロナウィルスによって世の中は一変した。特に教育現場では、学校の休校に伴い部活動が禁止され、それによって様々な公式戦といえる大会が中止になっていった。吹奏楽も例外ではなく、逆に室内で密になりやすいことと楽器を演奏するためにマスクを外すことで感染リスクが高いとされ、思うように練習ができない状況が続いている。こうした状況において連盟はガイドラインを提示し、感染対策の徹底を呼び掛けた。練習場での指揮者の前や奏者と奏者の間にパーテーションを置くことや楽器専用のフェイスシールドを使って感染対策に努める現場も増えている。そうした中、緊急事態宣言等各自治体からの発令で、公共の施設が利用できず、ホールでの練習や演奏会を催すことができない状況がある。そのため、練習しても演奏を披露する機会が少なくなり、吹奏楽に対するモチベーショ

ンを保つのが難しくなってきている。吹奏楽だけでなく、エンターテイメント業界はライブ活動が難しい。最近では動画配信による演奏会が増えてきた。

４．波及効果

吹奏楽連盟が果たす地域貢献については、単に教育現場や社会活動の音楽文化の発展だけでなく、それに関わる周りの経済効果はあまり深く考えられていない。そこで、まず、連盟行事において、どのような経済効果があるのかを見てみる。その上で、九州における波及効果を考える。

行事を行うには、会場の選択、楽器運搬、団員の移動・宿泊、練習会場の選択、飲食など、音楽以外の業界にも多大な影響がある。九州では、各県持ち回りで九州大会が行われ、その都度各県支部の役員が準備をする。参加団体にとって旅行会社との連携は非常に大切で、特に早朝の練習会場の確保など個別で対応するには手間がかかるので、代理業務を任せることで演奏に集中することができる。このように連盟が行事を催すことで、演奏に関わるものだけでなく、観光業界など音楽分野以外に対する経済効果は目にはみえないがかなり大きいと考えられる。

次に、ホテル宿泊施設、飲食業、お土産などの小売業、ホール施設、運送業など、多種多様な業種に対しての経済的な効果を見てみる。大会に参加する団体が県外や遠隔地または大会に参加する時間が早期であれば、宿泊を伴うことを選択することは考えられる。食事の面においても、大会当日の昼食（弁当）や宿泊での夕朝食は、参加団体数×参加人数からみると、数千人規模の人が利用するであろう。また、県外から参加した人の中には、必ず特産品やお菓子などその地域の名産品を購入することは大いにある。また、吹奏楽は大人数で音を出すことから、ある程度広い空間及び防音施設がある会場を探さなければならない。そういった環境を整えた場所には数に限りがあり、その施設を複数の団体が競争して取り合うことがよくある。各参加団体が事前に施設ホールを予約することが一般的だが、旅行代理店はこれらを一括して管理し、参加団体が気兼ねなく演奏に集中できる環境を作ってくれるので大変便利である。他にも吹奏楽は管楽器や打楽器を使うため、それらの楽器を運ぶ４ｔトラックなど大型の貨物輸送が必要になる。そういった音楽の演奏以外のことが大きく作用し大会が運営されていることは当たり前のように思うが、こうしてみると音楽の普及だけでなく社会の様々な業種に対し経済効果をもたらしていることが見える。

具体的に、令和元年８、９月に開催された第64回九州吹奏楽コンクールで試算する。

表１．第64回九州吹奏楽コンクール概要と参加団体数

イベント：第64回九州吹奏楽コンクール

会場：熊本市・熊本県立劇場（小学校、中学校、高等学校）

　　佐世保市・アルカスSASEBO（大学、職場・一般）

日程・部門：令和元年８月23日（金）小学校

　　８月24日（土）中学校（前半・後半）

８月25日（日）高等学校（前半・後半）
８月31日（土）大学
９月１日（日）職場・一般

参加料：20,000円／団体

入場料：中学校部門・高等学校部門　指定席　2,500円、自由席　1,500円
　　他部門　　自由席　1,500円

出演団体内訳

	小学校	中学校	高等学校	大学	職場・一般	計
福　岡	1	8	8	3	7	27
佐　賀	1	2	2	1	1	7
長　崎	1	3	4	1	1	10
大　分	1	2	2	1	1	7
熊　本	4	3	2	1	4	14
宮　崎	2	3	3	1	1	10
鹿児島	8	3	3	1	2	17
沖　縄	4	3	2	1	3	13
計	22	27	26	10	20	105

（出典：九州吹奏楽連盟令和元年度総会関係報告より）

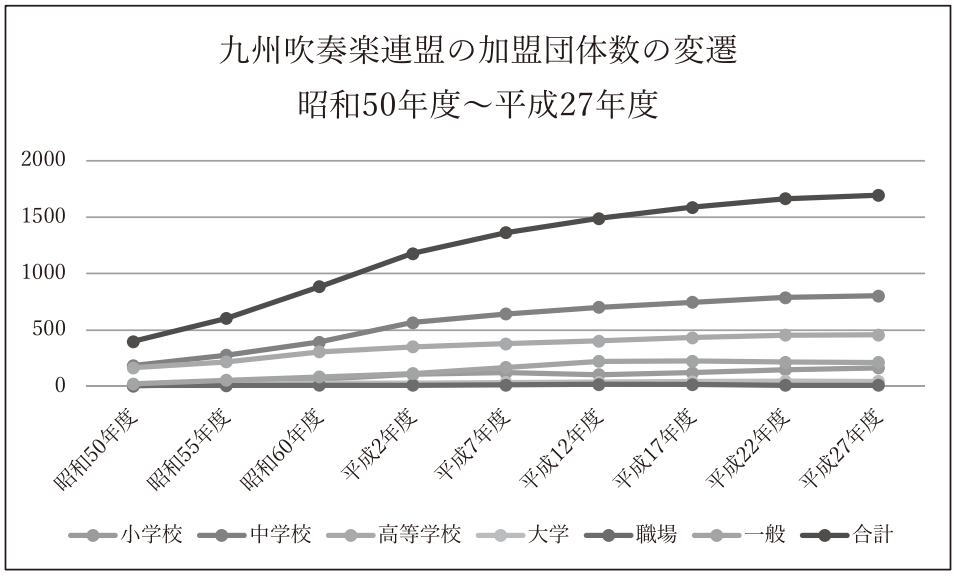
小学校から職場・一般まで105の出演団体があった。個々の数字はわからないため次のように概算で試算する。

参加人数（出演人数、付き添いの親やスタッフを含む）：一団体当たり100名
交通費・宿泊費・食費：一人当たり50,000円
運搬費：一団体当たり100,000円
105団体×（100名×50,000円+100,000円）＝535,500,000円
入場料：27,214,500円
会場費などの事業費：18,975,228円
合計：581,689,728円

この他にマーチングとアンサンブルが開催されているが、事業規模はコンクールの半分ぐらいである。当連盟による年間を通したイベントの経済効果は、約12億円となる。

また、吹奏楽にはイベントの経済効果のほかに吹奏楽人口（吹奏楽にかかわる人）による波及効果も考えられる。そこで、九州吹奏楽連盟の加盟団体数の変遷を調べてみた。

表２．九州吹奏楽連盟の加盟団体数の変遷



	小学校	中学校	高等学校	大学	職場	一般	合計
昭和50年度	3	185	166	13	9	23	399
昭和55年度	28	276	217	19	9	54	603
昭和60年度	62	394	307	27	11	84	885
平成２年度	107	566	351	28	11	115	1178
平成７年度	122	643	379	36	14	168	1362
平成12年度	105	702	404	37	17	223	1488
平成17年度	121	747	433	42	18	226	1587
平成22年度	148	788	455	47	11	215	1664
平成27年度	164	804	458	46	10	213	1695

（出典：九州吹奏楽連盟創立50周年記念誌、創立60周年記念誌より抜粋）

過去50年の加盟団体数の推移を見ると、昭和50年（創立20周年）時は、399団体だったが、平成17年（創立50周年）時では、1587団体と４倍近く増加している。令和３年、1599団体なのでこの15年間はわずかに増えている。今後、少子化により加盟数が減少するとも考えられるが、これまでの連盟が果たしてきた教育現場および一般社会への貢献は賞賛するべきであろう。当連盟の役割は、もともと広く一般に吹奏楽を広めることであり、その活動の場を提供することが本来の目的と考える。そうした中、様々な行事を企画立案し、実行してきたことが当連盟に加盟する団体が増えてきた要因であることは違いない。

次に、具体的な職場と大学の当連盟の加盟団体を見てみる。

表３．大学・職場の加盟団体名簿

加盟団体（職場）

支 部	団 体 名
鹿児島	鹿児島市消防音楽隊
鹿児島	鹿児島信用金庫吹奏楽部
大　分	日本製鉄大分吹奏楽団
大　分	大分県庁職員吹奏楽団
長　崎	三菱重工業長崎吹奏楽部
宮　崎	宮崎県警察音楽隊
福　岡	ブリヂストン吹奏楽団久留米
福　岡	福岡銀行吹奏楽団

加盟団体（大学）

支 部	団 体 名
北九州	九州共立大学
北九州	九州工業大学工学部
北九州	九州国際大学
北九州	西南女学院大学
北九州	北九州工業高等専門学校
北九州	北九州市立大学
筑豊	近畿大学産業理工学部学術文化会吹奏楽部
筑豊	福岡県立大学吹奏楽団
福岡	久留米工業高等専門学校吹奏楽部
福岡	久留米工業大学吹奏楽団
福岡	久留米大学学友会吹奏楽部
福岡	九州産業大学吹奏楽部
福岡	九州大学吹奏楽団
福岡	精華女子短期大学吹奏楽部
福岡	西南学院大学応援指導部吹奏楽団

支 部	団 体 名
大分	別府大学吹奏楽団
大分	大分大学文化会吹奏楽部
	２大学／４大学（50%）
沖縄	沖縄国際大学
沖縄	沖縄大学
沖縄	公立大学法人名桜大学
沖縄	国立沖縄工業高等専門学校
沖縄	琉球大学
	５大学／７大学（71%）
鹿児島	鹿児島国際大学吹奏楽団
鹿児島	鹿児島大学学友会吹奏楽団
	２大学／６大学（33%）
熊本	熊本学園大学
熊本	熊本高等専門学校八代キャンパス
熊本	熊本大学体育会吹奏楽部

支部	団体名
福岡	中村学園大学・中村学園大学短期大学部合同吹奏楽部
福岡	日本経済大学吹奏楽部
福岡	福岡教育大学吹奏楽部
福岡	福岡工業大学吹奏楽団
福岡	福岡大学応援指導部吹奏楽団
	18 大学／ 34 大学（53%）
宮崎	宮崎公立大学
宮崎	宮崎大学
宮崎	国立　都城工業高等専門学校
	３大学／７大学（43%）

支部	団体名
熊本	公立大学法人熊本県立大学吹奏楽部
熊本	崇城大学学友会体育委員会所属吹奏楽団
	５大学／９大学（56%）
佐賀	佐賀大学吹奏楽団
	１大学／２大学（50%）
長崎	（大）長崎大学
長崎	（独）国立高専機構 佐世保工業高等専門学校
長崎	鎮西学院大学
長崎	長崎総合科学大学
長崎	活水女子大学
長崎	長崎県立大学佐世保校
長崎	長崎短期大学
	７大学／８大学（88%）

（出典：九州吹奏楽連盟事務局名簿より）

職場の加盟団体を見てみると、九州で８団体しか加盟がない。スポーツの加盟団体であれば、九州では数十社が加盟しており、その団体がスポンサーとなって経済的支援を行っているのが一般的である。九州吹奏楽連盟では加盟が８団体と少ないため、コンサートなどのイベントを通じて財源の確保を行っているのが現状である。しかしながら、そのことはイベント参加者へ経済的負担を転嫁している。故に、イベント参加者は相当な負担を強いられている。今後は、イベント参加者は吹奏楽に専念できるよう経済的負担をイベント参加者以外に求めていくことが必要になかろうか。スポーツの加盟団体のように企業へのスポンサーになってもらったり、最近ではクラウドファンディングで支援をお願いするなどが考えられる。

冒頭でも述べた通り、現在の吹奏楽人口は500万人であると言われていることから、九州の日本における割合を10分の１であると仮定すると九州における吹奏楽人口は50万人と考えられる。2018年10月の九州の総人口が約1,431万人であることから九州に占める吹奏楽人口は3.5%となる。この3.5%という数字は、学校での教育を受けており部活動で吹奏楽部に所属する人や民間企業で吹奏楽部に所属していたり、地域での吹奏楽のサークルなどに参加している人たちも含んでいる。このことは、連盟の目的とする吹奏楽によって音楽の普及・発展や青少年健全育成を図るということにつながっており、音楽の社会的発展に貢献していることは伺える。

また、前述の通り、学校現場で部活動を指導する顧問の先生の中には、音楽の専任ではなく、吹奏楽を経験したことのある他の教科を担当されている先生が顧問になるケースが多く、大学を卒業する

吹奏楽部員の一部は教員になり、卒業後も吹奏楽にかかわる人も割合的には多いのでないかと思う。現に、柴田先生の話では、柴田先生が携わった学生がこれまで約３００人おり、そのうち約１５人が教員になっているとのことからしても５％を占めている。その人たちが教員となって吹奏楽にかかわり次の世代の吹奏楽人を育てている。

５．まとめ

今回、吹奏楽連盟の歴史的背景や活動状況を調査していく中で、これまで吹奏楽に関わってこられた諸先輩諸氏の並々ならぬ吹奏楽の発展に対するエネルギーがあったことがうかがえた。吹奏楽という演奏形態は、クラシック音楽界においては管弦楽ほど歴史が深くない。特に19世紀以降に作られた楽器を要する吹奏楽は、楽曲のレパートリーにおいても数少ない中で、有名な楽曲のアレンジや新しくオリジナル作品を作り出し、現在では吹奏楽という演奏形態が一つの集合体として存在を確立させている。その中で、吹奏楽連盟は音楽の社会的発展と教育現場の実情を見ながら、さまざまな行事を考案し実現してきた。コンクールから始まり、アンサンブルやソロコンテスト、そしてマーチングコンテストなど少人数から大人数まで幅広い演奏形態に関わる行事を催してきた。特にアンサンブルコンテストにおいては、オフシーズンと言われる秋から冬にかけて生徒のモチベーションを維持させることや個々の技術の向上において大きな意味を持つコンテストになっている。また、マーチングは歩きながら演奏することの楽しさを感じさせる機会を作っている。これから、より多くの若者が吹奏楽に関わり、音楽文化がより発展していくことを願いたい。

一方、この一年半の間、我々の社会は新型コロナウィルス感染拡大という恐ろしいウィルスによって世の中が一変した。コロナ禍において、世界中の経済は混乱し様々な業種が苦しい立場に陥っている。音楽業界､エンターテイメンビジネスにおいても同じである。当初､ライブハウスからクラスターが出て以来、エンタメ業界はすべてのライブが中止または延期され、ほとんどのアーティストは活動が出来なくなった。同様に､学校関係の大会等も中止を余儀なくされた。こうした中､たくさんのアーティストや研究者たちが飛沫に対する実証実験を行い、演奏会やライブ活動を早期に復活させることができるように取り組み、安全性を確認した。また、動画配信によるコンサートやコンテストが行われ、直接会場に行くことなく参加できる方法も生み出された。吹奏楽の世界においても、動画によるコンクール審査や無観客でのコンクールを実施することなど、イベントを中止することなくいかに催すかを考えるようになった。このことは、音楽業界の新しいビジネスモデルにもなり、これからの新しい生活様式の中心になり得るであろう。それは、参加する人々だけでなく、それに関わる様々な業種の人々にプラスの経済効果をもたらすことと考えられる。吹奏楽連盟もそうしたことを踏まえ、社会にもたらす影響は単に音楽の普及のみならず地域経済への波及効果をもたらしていると言える。このようなことから、吹奏楽連盟は多くの音楽愛好家が生涯音楽に携わることができる環境づくりを担う役割を大いに果たしていると考える。今後も今までと違う新しい生活様式において、吹奏楽が地域に及ぼす相乗効果や一つの組織が与える地域社会への役割について研究を継続していかなければならないと考える。

６．謝辞

今回の研究にあたり、資料を提供していただいた九州吹奏楽連盟及び福岡吹奏楽連盟の事務局および関係各位に深く感謝いたします。

注）

１）（2021）. 第66回九州吹奏楽コンクールパンフレット, 54頁。
　　2021年度九州吹奏楽連盟加盟団体数, 2021年6月30日現在。
２）（2001）. 九州吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 2頁。
３）（1986）. 九州吹奏楽連盟三十周年記念誌　二十年史補輯（Ⅱ）, 10頁。
　　昭和48年10月27日, 西日本新聞記事より。
４）（1976）. 西部吹奏楽連盟20年史, 32頁。
５）（1976）. 西部吹奏楽連盟20年史, 33頁。
６）一般社団法人 全日本吹奏楽連盟 定款より。
７）黒木正人（2016）. 福岡吹奏楽連盟創立60周年記念誌, あとがき。
８）（2001）. 九州吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 35-36頁。
９）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 18-19頁。
10）（2001）. 九州吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 35頁より抜粋。
11）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 20頁。
12）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 22頁。
13）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 21頁。
14）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 28頁。
15）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立60周年記念誌, 67頁より抜粋。
16）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立60周年記念誌, 75頁より抜粋。
17）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 23頁。
18）（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立60周年記念誌, 81頁より抜粋。
19）文化庁（2018）.「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
　　r1412126_01.pdf（bunka.go.jp）, 2021年9月24日。
20）文部科学省（2017）.「部活動指導員の概要」（mext.go.jp）, 20219月10日。

文献一覧

（1976）. 西部吹奏楽連盟二十周年記念誌, 社団法人全日本吹奏楽連盟西部支部.
（1980）. 西部吹奏楽連盟二十周年史補輯, 社団法人全日本吹奏楽連盟西部支部.
（1986）. 九州吹奏楽連盟三十周年記念誌　二十年史補輯（Ⅱ）, 社団法人全日本吹奏楽連盟九州支部.
（1991）. 九州吹奏楽連盟三十五周年記念誌　二十年史補輯（Ⅲ）, 社団法人全日本吹奏楽連盟九州支部.
（1996）. 九州吹奏楽連盟四十周年記念誌　二十年史補輯（Ⅳ）, 社団法人全日本吹奏楽連盟九州支部.
（2001）. 九州吹奏楽連盟四十五周年記念誌　二十年史補輯（Ⅴ）, 社団法人全日本吹奏楽連盟九州支部.
（2006）. 九州吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 九州吹奏楽連盟（理事長　高良孝純）.
（2011）. 九州吹奏楽連盟創立55周年記念誌, 九州吹奏楽連盟.
（2016）. 九州吹奏楽連盟創立60周年記念誌, 九州吹奏楽連盟.
（2001）. 福岡吹奏楽連盟創立45周年記念誌, 福岡吹奏楽連盟.
（2007）. 福岡吹奏楽連盟創立50周年記念誌, 福岡吹奏楽連盟（理事長　八尋　清繁）.
（2016）. 福岡吹奏楽連盟創立60周年記念誌【創立55周年記念誌補輯】, 福岡吹奏楽連盟.
　篠田雄一（2021）. 公益社団法人日本吹奏楽指導者協会, 吹奏楽紀要18号, 日本の吹奏楽黎明期に関する資料.